

■インタビュアー

調香師として生涯現役 振り返れば香りまみれの人生

茅原直人（中47回） インタビュアー構成／下平紀代子 大嶋みどり

日本で最も小さな？ラボ

「アートパービューマリー」

玄関とは異なる、もう一つの外扉の表札には、この文字を刻んでいます。その外扉に直結する部屋には、さまざまなサイズの瓶が壁面いっぱい並び、中央の台には黒光りした天秤が鎮座し、床は窯や一斗缶がそのスペースを占領しています。そして、おそらく誰も言葉では表現できないであろう複雑な香りが漂っています。この部屋が私のラボ。研究室であり、工房であり、仕事場です。私はここで香りを研究し、香りを作る仕事をしています。今でも現役のパビューマー（Perfumer）、調香師です。

「パビューマー」「調香師」——どちらもあまり聞き慣れない言葉かもしれませんが。香りを作るといっても、ピンとこないでしょうか。わかりやすい例をあげれば香水



●かやはら・なおと
東京・本郷の生まれ。母の美家だった伊賀良村に戦時疎開、飯田中学の2年に編入学した。戦後の混乱期、部活は音楽班に所属していたと思う。縁あって入った世界、香りに関わる仕事を生涯続けたい。趣味はカメラ。

ですが、それ以外にもさまざまな化粧品、洗剤や柔軟剤、芳香剤といった日用品にも香りがあります。「ラベンダー」や「バラ」「レモン」など、多種多様な香りつきの商品が氾濫しているのをご存じでしょう。この香りを作り出しているのが調香師なのです。

とはいえ、こんな小さなラボを持ってフリーランスで仕事をしている調香師は、日本では私くらいのものでしょうか。小さいからこそ重宝されることもあり、注文があるうちはまだまだ続けるつもりでいます。

それにしても、私がこの仕事に就いてすでに60年もの月日が流れました。自宅にラボを構えてからは40年になります。振り返れば香りまみれの人生ですが、この世界に入るまでは、世の中にこのような仕事があるなんて、まったく知らなかったのです。

飯田中学での思い出

さて、そんな私の人生を少し振り返ってみます。

私の生まれは東京の本郷です。両親の出身地が飯田だったことから戦争中に疎開して、飯田中学に編入しました。中学の2年の末、寒い季節だったと記憶していません。都会育ちですから、クラスメイトとは肌合いも違い、正直に言うところと中学時代は嫌な思い出のほうが先に浮かびます。戦時中で、学校工場で働かされており、つらいことが多かったからかもしれません。

それでも、なんとか楽しみを見つけて過ごしていたのでしょう。当時のことを綴った文章が残っておりまして、一部紹介させていただきます。

「飯田中学に転校してから、当時は学校工場にて、勉強どころか勤労働員で働かされ、楽器がどこにあるのかわからず、守屋先生におたずねして、物置の片隅にあるのを見つけました。トランペット他全ての楽器は錆びており、楽器の美しさが無く惨めな姿でした。当時は今のように真鍮磨きもなく、灰を使ってトランペットを磨き、自宅へ借りて帰り、唯一の楽しみで練習しておりました」

（『青春の記録Ⅱ』より）

ほとんど忘れてしまった遠い昔、70年前。飯田中学の

学生だった頃の私です。

香料との出会い

さて、飯田中学を出た後、しばらくは親父を手伝って伊賀良で百姓をやっておりました。その後、東京に出て、出版の取次会社で働いていたのですが、そこでたまたま知り合った香料会社の社長から「おまえ、香料をやってみないか」と声をかけられたのが、この世界に入るきっかけです。

迷う私を、社長が香料工場に連れていってくれたのですが、そこで目にした光景に私は心奪われました。その場で決意し、社長に「是非よろしくお願いします！」と頭を下げました。すると社長は「ただし、背広を脱いで来いよ」とひと言。要するに「丁稚からやれ」ということだったのですが、この真意は入社後にわかることとなります。26歳のときのことでした。

最初に配属されたのは製造部門で、先輩の処方箋通りに原料を調合して香料を作る仕事でした。覚えるまでは大変でしたが、慣れてくると大して難しくない仕事で、そのうち自分でも新しい香りを作ってみたくなくなりました。そうなるとうちで技術を覚えなければならぬのですが、教えてくれるような制度はありません。悪い言い方です



留学先のラボで、仲間と共に。

が、先輩の技術を盗む
しがなく、仕事が終
わってから毎日、ひと
り残って勉強すること
にしました。研究室の
連中や製造の先輩から
は「おめえにできるわ
けない」とばかにされ
ましたが、それでもあ
きらめず、勉強を続け
ました。

入社して2年ほどして研究室に移ることになりました。
いよいよ自分で香りが作れると期待をしましたが、そう
甘くはなく、雑用ばかりを言いつけられる日々がしばら
く続きました。その後、香りの開発をさせてもらえるよ
うになってからも、与えられるのは小さい仕事ばかり。
悔しい思いを相当しました。それでもやめようと思わな
かったのですから、この仕事が性に合っていたのかもし
れません。

このような時期を経て、次第に、私の作った香りも大
手企業の商品に採用されるようになりました。数多くの

香りを開発してきましたが、一番思い出深いのは、大正
製薬の殺虫剤「エアゾール」という商品です。この最初
の製品に、私の作った香りが採用されたのです。

フランスへの留学

香料会社に勤務していた時代、もう一つ忘れられない
思い出があります。それは、6か月間、香りの本場フラ
ンスに勉強にいかせてもらったことです。

日本ではまだ海外渡航が珍しく、羽田空港には赤じゅ
うたんが敷かれていた時代。外貨の持ち出しも制限され
ていて、会社からの送金もそう多くはなく、フランスで
の生活は厳しいものでした。それでも、この6か月は、
本当に素晴らしいものでした。それでも、この6か月は、

私のほかにも、他国から勉強にきている仲間がいて、
毎朝一緒に、匂いを嗅ぎ分けるトレーニングをしました。
紙に原料をしみこませ、匂いを嗅いで原料をあてるので
す。当時は、「ラベルを見るな。匂いは鼻で覚える」と
言われる世界で、一人前になるには、コツコツとした努
力が必要だったのです。

当時、私は休日には、近くのキャンヌやニースによく遊
びにいきました。チャオという原付バイクを50フランで
買い、専ら日帰りのバイク旅行。朝、フランスパンと天



ラボで調香

然バターと生ハムを買ってバイクにのせ、お昼に見晴らしのいいところに座って食べるような安旅行。お土産なんて買う余裕もなく、残っているのはたくさん写真だけです。趣味だったこともあって、本当にたくさん写真を撮りました。おかげで、今でも当時のことを懐かしく

振り返ることができません。といっても、妻が膨大な写真を整理してくれたおかげなのですが。

帰国後、しばらく会社に奉公するうちに自分の力をもっと試したいと思うようになり独立しました。自宅のあいている部屋で開業。それが、今のアートパービューマリーです。

生涯勉強

今でも香りには敏感で、近くにいる人が香水をつけていれば、それがどこのなんという商品かだいたいわかります。わからないと気になって仕方がないので、つい声をかけて確かめてしまうこともあります。「私はこういう仕事をしております。失礼ですが、香水は何をつけてらっしゃいますか？」と。

つい先日にも妻と出かけた帰り、電車で隣に座ったご婦人に香水の名前を確認して、妻に嫌な顔をされました。まあ、そのくらいでなければ、仕事は続けられません。それにしても、よくここまで続けてきたものだと思えます。挫折もありましたがそのたびに「負けるものか」と奮起して、この道一筋で進んできました。

意欲があれば何でもできる、いつまでもできる。そんな気持ちで、今もこの研究室に籠っているのです。